

「ありがとう」その先に

鈴木 絢乃

私には姉がいます。

勉強運動が得意で、明るく元気な人気者。

ケンカもしますが、自慢の姉です。

そんな姉に事件が起こりました。

突然の足の痛みと高熱により、きん急入院になったのです。

股関節の病気であった姉は、二度の手術をしましたが、回復することはなく、姉はもちろん、

私たち家族にとつて、辛く苦しい日々が始まったのです。

「大丈夫。絶対治るから、自分を信じて。」

病室で、母といっしょに泣いている姉を見たとき、胸がしめつけられる思いでした。

いつも一緒に歩いていた学校への道。

一人で歩くと、長く感じ、姉が走ってくる気がして何度もふり返りながら歩きました。

姉の友達から病気のことを聞かれるたび、笑顔で答えましたが、本当は涙をがまんしている、

そんな日が続きました。

ある日の病室でのこと。両親が担当医師に呼ばれ、私と姉は、学校での出来事や、友達のこ

とを笑いながら話していました。

笑いが止まったとき、姉が真剣な顔で、

「あや。私ね、もう歩けないかもしれない。」

びっくりしましたが、私はとっさに、

「歩けなくてもいいじゃん。」

「どうして！ 車いすが無いと動けない姉ちゃんなんてはずかしいでしょ！」

姉は、大粒の涙を落としながらも私の目をグツと見つめ、私の言葉を待っていました。

「姉ちゃんがいけないのはさみしいよ。車いすでもいい、居てくれるだけでいいから。」

私と姉との間に不思議な空気が流れ、どれくらいの時がたったのか、両親が戻ってきました。

母はその場の空気を察したのか、私たちに姉のクラスみんなからの手紙を見せ、また笑いな

がら、姉との時間を過ごしました。

翌日、姉は大学病院へ転院しました。

大学病院での姉の病室は、両親以外は面会禁止で、私が姉に会うことはできません。

そんな中、手術後の姉が一行の手紙を書いてくれました。

「あやへ、たくさん泣こう。そしたらおもいきり笑おうね。今まで本当にありがとう。精一杯の感謝を送ります。」

普段、痛みや苦しさを見せない姉が、懸命に書いた文字と言葉に涙が止まりませんでした。

あれから間もなく二年。病気を乗り越え、受験にも合格し、電車で元気に中学校へ通う姉。

元気に走る後ろ姿は、歩けなくなる病気であったことなど感じさせない、以前の力強い背中

です。悲しみや苦しみに勝ち、さらに強くなった姉は、自慢の姉から、私の目指す目標に変

わっていました。

私達が姉妹という当たり前の中に感謝があることや、病気に打ち勝つ心の強さを教えてく

れてありがとう。そしていつの日か、お姉ちゃんの背中、乗り越えてみせるから！

評価のポイント

高い文章力と、お姉さんのその後が気になり、一気に読ませる作品。